HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	『祖国の砂　日本無名詩集』を跡付ける　第三回
著者	石井，耕；ISHII，Kou
引用	北海学園大学学園論集(179)：9-35
発行日	2019-07-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

『祖国の砂　日本無名詩集』を跡付ける　第三回

石　井　　耕

F　教員など

「教員」としては，岩井美沙夫，加能徹，石田良雄，はさま・にんの 4 人が該当する。他にも，当時は学生であった蛭間裕人，草階俊雄，安藤美紀夫もその後教員になっている（安藤美紀夫はさらに高校教員から大学教員へ）。また，地方公務員の柳原真佐夫もこのグループに含めた。

F-1　岩井美沙夫「愛するひと」

作者紹介では，「岩手県　1929 年 10 月 8 日生れ　22 歳　岩手大学学芸学部修了。平館中学校助教諭を経て現在瀧澤小学校教諭。『新日本文学』『北流』『北原』『文学系』『雑文クラブ』」である。

F-2　加能徹「道」

作者紹介では，加能徹は「石川県羽咋郡加茂村（現志賀町）　1927 年 9 月 10 日生れ　25 歳　農学校，青年師範学校卒。教員。『天童』」である。

本名は浅井徹雄である。1985 年に，『浅井徹雄　三十六歳　火の詩集』が遺稿集として，編者前田良雄によって発行されている。これによると，浅井徹雄は 1964 年 1 月 22 日に急性心筋梗塞で逝去された。享年 36 歳であった。この詩集の「道―道の詩を書くこと」初出『橡』（4 号，1951 年 10 月 20 日）が，『祖国の砂』に掲載された「道」である。なお，同詩集において浅井徹雄は「道」という題名で，7 篇の詩を書いている。編者前田良雄は「浅井徹雄のいる風景」で「当時に思いが馳せてしまう。戦後ようやく落ち付いたとはいえ，いまだ物の豊かでなかった昭和 36・7 年，その頃には珍しい発電ランプの付いた自転車のペダルを踏んで，山道を通勤し「道」の詩を書いていた浅井徹雄がいる。」

「23 年の暮れ，青年師範学校の卒業期をひかえ，『涙　浅井徹雄詩集』を金沢・二俣和紙の厚漉を使い，ガリ版刷りで二十篇ばかりの詩集として編んでいる。」「その詩集に，詩の先輩，増村外喜雄がことばを寄せている。── 浅井君が二年の集積を小集に編んで，「涙詩集」を出すことは，私としてうれしい。浅井君の詩は，けっしてうまい詩でも，美しい詩でもないが，どことなくあ

たたかいものを感じほほえましさを覚える。」と懐古する。

遺稿詩集に掲載された浅井徹雄の詩の初出は，『骨』『馬』『橡』『石川詩人』『天童』『目撃者』『青馬』に掲載されたものである。(他に，「蛙」『北国文化』53号（1950年5月30日)，「たんぽ」『北国文化』54号（1950年6月30日）を発表している。)

この詩集の略譜によれば，次のとおりである。

1927年9月10日	石川県羽咋郡加茂村（現志賀町）字倉垣に生まれる。
1946年3月	松任農学校農林科卒業。
1948年12月	『涙　浅井徹雄詩集』刊。(新日本文学会石川支部から出す)
1949年3月	石川青年師範学校卒業。
	(その後，金沢大学教育学部設立の母体の一つとなる)
1949年4月	堀松中学校教諭となる。
1951年4月	下甘田中学校，さらに下甘田小学校，下甘田中学校へと勤務する。
	この数年間，下甘田公民館主事を兼務する。
1961年4月	高浜中学校に勤務する。
1964年1月22日	急性心筋梗塞のため死去。享年36歳。

F-3　石田良雄「自転車」

作者紹介では，石田良雄は「石川県　1927年10月8日生れ　24歳　農学校，青年師範学校卒。教員。『天童』」となっている。出身地（現在の志賀町)，農学校，青年師範学校，教員と浅井徹雄と同じ道を歩む。

北陸詩人会会報『北の人』(1946年8月，1号）に関係する。また，『骨』を引き続き増村外喜雄，浅井徹雄の三人で出す。詩集『子供画帳』(1947年10月）をプリント版で刊行する。

新日本文学会編の『勤労者詩選集』1948年版に「農」が掲載されている。さらに，『日本未来派』(44号，1951年5月1日）に「日子」「石苔の邊りにて」を発表している。同（46号，1951年10月5日）に「累坐」「不幸」を発表している。

1951年9月『眺望　詩集』(石川県富来町，橡詩人会）を出版した。『橡』は，1951年6月創刊で，発行橡詩人会，編集発行者石田良雄である。浅井徹雄も参加していた。作者紹介にある『天童』も数名のグループで発刊している。

なお，前述の『浅井徹雄　三十六歳　火の詩集』の編者は前田良雄であるが，石田良雄と同一人物と考えられる。前田良雄は高齢であるが，著名な版画家である。中日新聞2013年12月24日の「匠を訪ねて」のシリーズに，版画師前田良雄（86）が掲載されている。「版画がさかんな志賀町の礎を築いたと評される」前田が「版画と出会ったのは，石川青年師範学校の学生時代」である。『百姓の子詩集no116，no120　12集　百姓の子らは百姓の暮らしをうたう』(1961年）という志賀町下甘田小学校編の本に，下甘田小学校6年指導の前田良雄が登場する。同じころ，浅

井徹雄が下甘田中学校，前田良雄は下甘田小学校の教諭だったのである。

近年も，『しかの歴史散歩』（室矢幹夫著，前田良雄版画，志賀町立図書館出版，2012 年 3 月）や『版画詩集　草千里人万里』（徳沢愛子詩，前田良雄版画，北國新聞社，2017 年 1 月）が出版されている。

F-4　はさま・にん「おれたち」

大分市のはさま・にん（挟間任）は，1925 年生まれの 26 歳であり，「九州」のグループとも考えられる。彼は，丸山豊・安西均・谷川雁などの久留米を中心とした詩誌『母音』に投稿している。『戦後詩誌総覧④』の『母音』の目次によれば，第 2 期第 2 巻第 1 号（通刊 14 号，1952 年 1 月 1 日発行）に「噴水」を発表している。また，『方向』第 1 冊・第 1 巻第 1 号（1951 年 3 月 1 日）に「寝台のオード」を発表している。さらに『開墾』No2（1955 年 6 月 25 日）に「抒情」を発表している。

『母音』の同人名簿には，通刊 13 号（1951 年 11 月 15 日）から掲載されている。通刊 16 号（1952 年 5 月 15 日）では大分市在住である。通刊 18 号（1954 年 5 月 25 日）では，別府市に移動している。通刊 23 号（1955 年 9 月 26 日）では別府市である。

また，詩集『寒庭』を，1950 年松尾書店（大分）から刊行している。もう一冊詩集『前進』を刊行しているようだ。

一方，1947 年 3 月大分師範学校卒の教員である。ここでは，「教員」のグループに含めてみた。この当時は大分市立の小学校に勤務している。

この当時の教員に大きく影響を与えたのが，戦前の生活綴り方運動をうけつぐ作文教育である。とくに無着成恭の『山びこ学校』が出版されたのは 1951 年のことであった。無着成恭が 3 年間担任した山形県山元中学校（現上山市）の生徒たちの作文集であった。戦後大きく変化した教育を，中学生たち自身の声で描き出したところに，新鮮なものがあったのである。

この綴り方運動は，多くの教員に影響を与え，全国で数多くの作文集が作られた。小学校の教員であったはさま・にんもその一人である。大分市東大分小学校 5 年生の担任として，1952 年に『うぶ声』という文集を出している。前項の石田良雄も『百姓の子詩集』を発行している。

F-5　柳原真佐夫「一九五一年広告税について」

作者紹介は次の通りである。「秋田県大館市　1926 年 2 月 7 日生れ　26 歳　秋田県立鷹巣農林学校卒。地方公務員。『詩学』『半夷』」もう少し詳しくは「詩学研究会会員，1952 年 2 月号研究会作品発表「黒い序章」（代表作）。秋田県詩人協会会員。『半夷』同人。『北方文藝』同人。1942 年より詩らしきもの書き初む。処女詩集未だ無し。」と書かれている。

『半夷』は，秋田で発行されていた詩誌である。

柳原は 1980 年詩集『掛図』（秋田文化出版社），1984 年詩集『金銭考』（刻詩社）を刊行してい

る。

1986年逝去された。享年61歳であった。

他にも，柳原真佐夫と同じ公務員としては，雨宮杉夫は国家公務員，三枝源七は東京都水道局，山田今次は地方公務員であった。さらに後述する国鉄・郵便局まで含めれば，公務員はこの詩集に数多かった。

G　銀行員

ここでは，千早耿一郎，鈴木豊久，いくみ・のぶる，石垣りんの4人を対象とする。千早，いくみ，石垣は，『銀行員の詩集』の有力執筆者であった。

G-1　千早耿一郎「一九四三年，冬の手帳」

作者紹介は次の通りである。「東京都　1922年3月5日生れ　30歳　銀行勤務。第一神戸商業学校卒。『コスモス』『群』」

『群』には，いくみ・のぶるも参加している。日本銀行の従業員によるサークルの詩誌と思われる。

ちくま文庫の作者紹介では次の通りである。「滋賀県生れ。中国（上海，青島）で育つ。帰国して神戸商業学校卒業後，日本銀行入行。42年に入隊し，中国で初年兵教育を受けつつ「討伐」に出動する。現地の予備士官学校を卒業後，挺身攻撃隊長として訓練中，終戦を迎える。46年，日本銀行に復帰し，吉田満を知る。事務繁忙の時間を割き，吉田らと文芸活動に従事する。」

竹内浩三『愚の旗―戦死やあわれ』（「戦争と平和」市民の記録②，1992年）の解説で，千早耿一郎はこう書いている。竹内は1945年4月9日，フィリピン・バギオで戦死した。「竹内浩三が三重県久居の歩兵第三十三連隊に入隊したのは，1942年の10月のことであった。その2カ月あと，12月に，僕は同じ連隊にはいった。だがぼくは，竹内浩三の名も顔も知らなかった。」「ぼくは，入隊して10日ののちに，久居を出発し，中国の野戦に送られ，現地で初年兵教育を受けた。」

千早は，『銀行員の詩集　1952年版』では，「夕やけにうたった歌」「おむつの歌」「夏の花」が掲載されている。『同　1954年版』では，「そろばんの歌」「日本への回帰」が掲載されている。『同　1955年版』では，「銀行の窓」が掲載されている。

さらに，『現代詩』2-6（1955年6月1日）に「羊と少女」を発表，4-4（1957年5月1日）に「砂漠の町」を発表，5-9（1958年9月1日）に「九官鳥」「熱帯魚」を発表している。また，8-8（1961年8月1日）では，今月のベストスリーに，石垣りんによって選ばれている。「背中の歌」「顔」（『銀行員の詩集』掲載）である。

また，千早耿一郎は，『大和の最期，それから：吉田満戦後の軌跡』（2004年12月，講談社，2010年7月，ちくま文庫（こちらでは「「戦艦大和」の最期，それから：吉田満の戦後史」））と，『おれはろくろのまわるまま：評伝・川喜多半泥子』（1988年6月，日本経済新聞社）を書いている。

これらに共通するのは，銀行勤務の傍ら芸術に打ち込んだ吉田満，川喜多半泥子といった先輩たちの評伝であるということである。

千早耿一郎自身，銀行勤務の傍ら，多くの著書を著してきた。仕事では，日本銀行国庫局調査役となり，後に百五銀行調査役を歴任した。

千早には，多くの著書があるが，詩集としては，『長江』（1954 年，かいえ社），『黄河：詩集』（1983 年 2 月，花神社），『風の墓標』（1998 年，木耳社），『いちゃりばちょーでー：言の葉詩集』（2005 年，木耳社），『千早耿一郎詩集』（2007 年，現代詩人文庫 8，砂子屋書房）が刊行されている。

G-2　鈴木豊久「代えがたき友」

作者紹介は次の通りである。「東京都　1916 年 2 月 20 日生れ　36 歳　銀行員。」

掲載詩の一節である。

「ああ　代えがたき友よ ──
　ペンよ　帳簿よ　算盤よ
　お前達はみんな
「私の生活」を戦う武器だ　弾薬だ。
　しかし ──」

G-3　いくみ・のぶる（井汲伸）「おれたちのふるさと」

作者紹介は次の通りである。「東京都　1929 年 2 月 12 日生れ　23 歳　岡山県津山商業学校卒。銀行員。『群』（職場のサークル誌）」

もう少し詳しくは次のようである。「卒業後，現在勤務中の銀行に就職。詩を書きはじめ，職場でサークルを同好の士とともにつくり，現在に至っている。」千早と同じく日本銀行勤務であった。

いくみ・のぶるは，『銀行員の詩集』の常連執筆者であった。『銀行員の詩集』は，1951 年第 1 集から，1960 年第 10 集まで刊行された。第 5 集までは全国銀行従業員組合連合会（全銀連）文化部からの刊行であった。第 6 集以降は，銀行員の詩集編集委員会編，銀行労働研究会からの刊行になった。全銀連が，全国都市銀行従業員組合連合会（都銀連）と全国地方銀行従業員連合会（地銀連）に分割されたからである。

『銀行員の詩集』は，著名な詩人に編集を依頼した。1951 年の第 1 集は，壷井繁治，大木惇夫編であり，第 2 集は，野間宏，伊藤信吉編であった。「第 1 集は，集まった千余篇のなかから壷井・大木両詩人によって，93 篇が選ばれた。」「巻頭にはすでに詩人として活躍していた千早耿一郎（日本銀行）の三篇，次いで石垣りん，以後このアンソロジーの常連となる井汲伸などの作品が見いだされる。」（有馬敲「石垣りんと『銀行員の詩集』」）

井汲の掲載詩は，『銀行員の詩集　第2集　1952年版』掲載である。1952年版には，他に「地上の愛」(井汲伸名義）が掲載されている。『同　1954年版』には，「狐火」(井汲伸名義）が掲載されている。

その後，井汲は『現代詩』2-10（1955年10月1日）に「木の葉」を発表している。

G-4　石垣りん「私の前にある鍋とお釜と燃ゆる火と」

石垣りんについて，竹内（2009）は，次のように紹介している。「『人民文学』1953年2月号に掲載された座談会「職場と詩」では，石垣りんが全銀連（全国銀行従業員組合連合会）の詩人として参加し，次のように述べている。」「『祖国の砂』はたしかに私にもあまり魅力がなかった。でも中野重治さんなんかに赤木（健介）さんのおっしゃるように，目がないとはいえないと思うんです。やっぱり詩人としての相当の目をもっていらっしゃると思うんですよ。それで『京浜の虹』はやはり技巧的にまずいのではないかと思います。下手に良いところとわるいところがあって，良いところを認めないのはこまりますけど，『京浜の虹』はたしかにいいものをもつているでしょうけど，でも下手なものはやはり下手だと思うんです。」「座談会の石垣りんは，はつらつとしていて積極的に発言している。政治的な枠組みのなかにはいない自由な立場から出された率直な見解であったと見てよいだろう。誰もが石垣りんのようにはつらつとして率直であればよかった。」（このことは，秋山清の「『祖国の砂』と『京浜の虹』」でも取り上げられている。）

『祖国の砂』の作者紹介では，石垣りんは「東京都　銀行員」としか紹介されていない。

『石垣りん詩集』（岩波文庫版，2015）に掲載されている「石垣りん自筆年譜」によれば，『祖国の砂』掲載時点の1952年8月前後の状況をつぎのように述べている。なお，石垣りんは，日本興業銀行に14歳で就職し，定年（55歳）まで勤め上げた。

「1950年　30歳　4月　職員組合執行部常任委員になる。任期半年。メーデーに初参加。6月，朝鮮戦争勃発。レッド・パージも始まっている中で，委員会は緊迫，活気に満ちていた。7月，詩誌『時間』同人に参加。一年足らずで辞す。」

「1951年　31歳　アンソロジー『銀行員の詩集』(1951年版）刊行。選者壷井繁治，大木惇夫両氏。「原子童話」「用意」「白いものが」「よろこびの日に」4篇収録される。『銀行員の詩集』は以後年1回，選者を替えて計10冊刊行。」

「1952年　32歳　『銀行員の詩集』(1952年版）伊藤信吉，野間宏両氏により「祖国」「私の前にある鍋とお釜と燃ゆる火と」ほか2篇選ばれる。4月，考査部へ異動。」この1952年版から，「私の前にある鍋とお釜と燃ゆる火と」が選ばれたのである。初出は職場の組合の機関紙の女性特集号であった。

「1954年　34歳　10月より翌年3月まで職員組合執行部常任委員。」

1950年の「委員会は緊迫，活気に満ちていた。」という表現が印象的である。

なお，興銀では，その後，業務部，経営研究部，行友会事務室，管理部，興銀データサービス

（出向）へと異動する。

さて，掲載詩の「私の前にある鍋とお釜と燃ゆる火」を異質な視点で考えてみたい。

「自分のちからにかなう
　ほどよい大きさの鍋や
　お米がぷつぷつとふくらんで
　光り出すに都合のいい釜や
　劫初からうけつがれた火のほてりの前には
　母や，祖母や，またその母たちがいつも居た。」

戦後家庭の三種の神器といわれた電気製品がある。電気洗濯機，電気冷蔵庫，電気炊飯器である。電気炊飯器の代わりにテレビをいれる場合もあるが，テレビのほうが時期はやや遅い。また，女性の家事時間を短縮したことから考えると，電気炊飯器のほうがふさわしい。

本格的に電気洗濯機が登場したのは 1949 年のことであり，1953 年には三洋電機の噴流式洗濯機が出て，価格も安くなり，需要は拡大した。1960 年には 2 槽式洗濯機が出ている。

また，台所の改善としては，都市ガスあるいはプロパンガスを使ったガスコンロの普及があった。かまどあるいは七輪に代替していったのである。日本ではじめてプロパンガスを家庭用に使い始めたのが，ちょうど 1952 年であった。1953 年の第一次エネルギー供給の構造を見ると，石炭が 52.8%，水力 19.7%，石油 17.7%，そして木炭・薪 8.6%という状況であった。家庭では，まだ薪炭が多く使われていたのである。

石垣りんの生家の家業は「薪炭商」である。もともとは伊豆の出身の両親から，東京赤坂の商家に生まれた。空襲に遭い，戦後，家族 6 人で「品川の路地裏にある十坪ほどの借家」に住んでいた。「私の前にある鍋とお釜と燃ゆる火と」は，この借家にあったかまどと思われる。この詩が書かれた頃は，薪炭を燃やした火で，煮炊きしていたのであろう。

多くの家庭では，1950 年代から 1960 年代にかけて，かまどはガスコンロに代わり，お釜は電気炊飯器（あるいはガス炊飯器）に代わっていったのである。

H　国鉄など

ここでは，柏岡浅治，高橋兼吉，眞貝欽三，今井朝二，榎本満，飯村亀次の 6 人の「国鉄詩人」と，私鉄労組のつざか・もといを対象とする。

職場の詩のサークルとして，最も大規模であり，また長く継続したのは，国鉄詩人連盟であろう。しかし，その道のりは紆余曲折に満ちたものであった。以下，国鉄詩人連盟については，『国鉄詩人連盟十年史』に依拠している。中村（2014）も詳しい。

全国運動史によれば，1946 年 2 月，東京に東鉄詩話会が結成され，機関誌『国鉄詩人』が創刊

された。編集発行人は岡亮太郎（鈴木茂正）であった。同じく，新鉄詩話会（新潟）が，眞貝欽三，今井朝二，田中伊左夫によって創設され，46年8月『新鉄詩人』が創刊された。1946年6月，国鉄詩人連盟が発足し，徐々に，鉄道管理局ごとに，全国に詩話会がつくられていった。東鉄詩話会の機関誌であった『国鉄詩人』が5号から国鉄詩人連盟の中央機関誌となった（その後も変遷はある）。

この時期の時代背景として，1949年6月1日，公共企業体の日本国有鉄道が発足し，鉄道省・運輸省から変更されたことが大きい。国鉄発足とともに，行政機関職員定員法にもとづく人員整理が始まった。いわゆるドッジラインの一環であった。歳出を歳入以下に抑え込む超均衡予算を組んだのである。その結果，インフレは抑え込まれ，1ドル360円の固定レートが実施されることとなった。しかし，その副作用は，厳しい不況，輸出減となってあらわれた。人員整理は，政府系機関285,000人にも及び，大量の解雇者が出たのである。1949年7月，国鉄においても，定員法による95,000人もの大量の解雇が行われた。これによって，国鉄詩人連盟も，多くの詩人を失うこととなった。

H-1　柏岡浅治「死んだひとに」

作者紹介は次の通りである。「大阪市　1926年12月15日大阪生れ　25歳　神戸工専建築科卒(現神戸大学)。国鉄職員大阪工事事務所職員。『交替詩派』」

さらに「関係詩誌『交替詩派』創刊より参加して現在に至る。国鉄詩人連盟加盟。」と書かれている。柏岡浅治は技術者であった。

1947年，大鉄詩話会が発足し，機関誌『大鉄詩人』が刊行された。それが，1949年4月に「発展的昇華」して詩誌『交替』(1950年4月『交替詩派』に改題）となったのである。この詩誌は52号（53年7月）の終刊まで4年半，同人詩誌としては珍しく月刊を確保していた。「勤労詩運動を国鉄部内に留めるのではなく，部外の勤労詩人たちを含めて一つの詩誌に発展すべきではないか」という考えに基づいていた。

柏岡浅治は書いている。「茫々30年前，20歳台中期の私は，小さな詩誌の編集，校正，発送事務に余暇の殆どの時間を費やしていた。無名に終わった愛すべき分身を，いま書架の奥から取り出すと，戦後の粗悪な紙はすでに黄色く変質し，創刊2周年を期して奮発したアート紙の薄い表紙からは，標本箱の蝶の翅粉のようなものが零れ落ちた。」

前述したように，柏岡浅治は，国鉄内だけではなく，大阪での熱心な詩誌の活動メンバーであった。加藤新五（須藤和光）とともに，鶴見俊輔との鼎談に参加したり（「詩と思想」），後述する『祖国の砂』『京浜の虹』についての1952年12月に行われた大阪での在阪詩サークルの合同討論会で，中村泰（I-3）と意見が対立したりした。

「死んだひとよ。

あなたのたましいは
いま
どのあたりにさまようか。
あなたのにくたいは
もう
くちはてて
みなみの島に
あとかたもとどめぬだろうか。
あなたが
みなみの島に
うえて死んでから
今日
七年になる。」

掲載詩の「死んだひとに」は，『新日本文学』1951 年 9 月号に掲載されている。初出は『交替詩派』である。さらに『新日本文学』1953 年 7 月号に「国鉄勤労詩運動の現状―第 8 回全国鉄詩人大会にふれて」を書いている。

柏岡浅治は，国鉄詩人連盟の中心メンバーの一人でもあった。中村（2014）は柏岡浅治を「稀代の論客」としている。また,「国鉄詩人きっての碩学であり理論派」とも評されている。1953 年のこの文章では，国鉄勤労詩について「勤労詩の新方向」「詩はなんのために，誰のために書くか」「勤労詩理論と実践」が討議の中心におかれていたとする。「『祖国の砂』『京浜の虹』この二つのアンソロジーに激発された働くものや民衆を基盤とする詩運動の高まりとその問題点等が意外なほど国鉄の詩人たちのあいだに根をおろしていない。」と指摘する。

また，国鉄詩人連盟の現状について，次のように報告している。「連盟発足当時，国鉄は 9 鉄道局にわかれており，このうち 7 局において詩話会が結成されていたのだが，1950 年，機構改革に伴い全国 27 の鉄道管理局に分割され，うち 13 局に詩話会が結成されているわけである。相対的に，かなりの空白地帯を残しているといえるだろう。」

「大阪では，もと『大鉄詩人』が改組して『交替詩派』となり，早くから国鉄の詩誌の域を脱している。」「天王寺には，もと『大鉄詩人』から分離した連中が『暦心』によって活動を続けている（1953 年 2 月から柏岡もそこにも参加）。」「東京には連盟本部がおかれており，岡亮太郎がその責任者になっている。近藤東，飯村亀次等の論客が揃っており，『詩生活』を出している。」「新潟には田中伊佐夫の『うらぶれた海底に黄色い花が咲いたら』があり，今井朝二が加わっている。」飯村，今井は後述する。

1952 年 10 月，谷沢永一に誘われ，柏岡浅治は大阪の『詩と真実』創刊に参加している。その後

『現代詩』2-10（1955年10月1日）に「憤怒について」を発表，3-6（1956年7月1日）に「優しい歌（二篇）　子供を呼ぶ　ひとに」を発表している。

また，『現代詩手帖』4-7（1961年7月1日）に「日本現代詩人会の「夏の詩祭」」を書いている。『詩学』1963年4月号に「中野重治論（詩人論1）―その文学的青春の意味」を発表している。

『国鉄詩人』223号（2001年12月号）が「追悼・柏岡浅治」となっている。同じく『国鉄詩人』別冊（2001年10月）は「レクイエム「柏岡浅治選詩集抄」」となっている。

H-2　高橋兼吉「煤煙」

作者紹介は次の通りである。「山形県東根町　1914年1月25日生れ　38歳　小学校卒。印刷職工，新聞配達等を経て，現在国鉄職員。『詩人会議』『索座』『秋鉄詩人』」

さらには「この間20余年，詩作を続け，自ら『制作塔』，『詩現実』，『詩旗』等の詩誌を編集主宰した，故竹村俊郎，真壁仁らと山形県詩人協会設立。現在同会所属。国鉄詩人連盟，秋鉄詩話会所属。」と書かれている。秋鉄は，秋田鉄道管理局である。

掲載詩の一節である。

「汽車は毎日走る
　汽車は毎日煙を吐く
　この官舎は毎日煤煙を浴びる」

1985年に逝去された。

『詩集真珠婚』（1970年），『合歓木の歌』（1970年，国鉄詩人連盟），『冬の滝　高橋兼吉遺稿詩集』（1986年，私家版）が刊行されている。また，1986年『国鉄詩人』に「特集高橋兼吉追悼」が出されている。

H-3　眞貝欽三「眼鏡について」

作者紹介は次の通りである。「新潟市　1918年2月22日生れ　34歳　高田専修学校夜間部修了。鉄道教習所専修部修了。国鉄職員。『新鉄詩人』『国鉄詩人』『詩作工場』」

さらには「17歳の頃から詩作に専念，22歳国鉄に就職後，近藤東，田村昌由，田中伊佐夫氏等を知り，詩壇の多くの詩人との交流も始まる。『新鉄詩人』を終戦後間もなく，46年8月に発刊，東京の近藤氏等と共に国鉄詩人連盟の結成につとめ今日に及ぶ。なお，『新鉄詩人』は32号を刊し，50年5月『E 10』と改題，機構改正後休刊している。」と書かれている。新潟での詩話会の結成は，前述した通り，東京と並んで，全国でも最も早く，その中心メンバーの一人が眞貝だったのである。当時の新鉄管内は長野，新津，山形，秋田の4管理部から成っており，山形には，前項の高橋兼吉などがいた。1950年の機構改革によって，山形，秋田，青森が秋田鉄道管理局の管

内となり，秋鉄詩話会が発足することとなった。

眞貝は，大島博光の創刊した『歌ごえ』2号（1948年）に「新鉄の詩人たち」を発表している。

また，1946年度の第一回国鉄詩人賞に，眞貝の「列車運行状況調査」が選出された。ここでの所属は新鉄局運転部となっている。この詩は新日本文学会編の『勤労者詩選集』1948年に，再掲されている。

H-4　今井朝二「一日しぶきたてて雨がふった」

作者紹介は次の通りである。「新潟県北蒲原郡米倉村（現新発田市）　1925年1月2日生れ　27歳　高小卒。線路工手。『うらぶれた海底に黄色い花が咲いたら』同人。」

さらに「近藤東選による雑誌『鉄道』により詩を書き始める。1946年国鉄詩人連盟員となり，『国鉄詩人』,『新鉄詩人』に作品発表。勤労詩に魅力をもつ。現在『詩と詩人』に片足をつっこむ。」と書かれている。眞貝と同じく，『新鉄詩人』の創設メンバーの一人である。その後，田中伊左夫主宰の『うらぶれた海底に黄色い花が咲いたら』に参加する。

新日本文学会編の『勤労者詩選集』1948年に，「遮断機」が掲載されている。国鉄新津保線区の所属となっている。

その後，詩集『車中の少女』（国鉄詩人連盟，1972年3月）を刊行している。ここでの略歴では，

1940年　国鉄就職　線路工手になる

1946年　新鉄詩話会，国鉄詩人連盟に参加

となっている。

H-5　榎本満「死火山」

作者紹介は次の通りである。「和歌山県勝浦町（現那智勝浦町）　1920年11月14日生れ　31歳　高等小学校卒。鉄工所徒弟1年を経て，国鉄に就職。現在国鉄職員。『紀南文学』（停刊中）」。

兵役は「現役で蒙古，北支，内地帰還，計2年，その後国鉄復職」となっている。

中村（2014）によれば，1952年『平和詩集』が大阪平和友の会準備会より，刊行されている。その中に榎本満「映画館にて」（『紀南文学』）が掲載されている。

また，『新日本文学』1952年10月号に「死火山」が掲載されている。『紀南文学』6号からの転載であり，『祖国の砂』にすでに掲載された作品である。

H-6　飯村亀次「あいつが喋っている」

作者紹介は次の通りである。「千葉県東葛飾郡木間ヶ瀬村（現野田市）　1925年1月2日生れ　27歳　国鉄職員。『新日本詩人』『詩生活』（東鉄詩話会）同人」さらに「戦後『国鉄詩人』『新日本詩人』『新詩派』等に作品やエッセイを発表してきた。」と書かれている。

新日本文学会編の『勤労者詩選集』1948年に，「靴みがき」が掲載されている。飯村は国鉄品川

車掌区の所属となっている。また，東鉄詩話会の有力メンバーの一人であり，1951年の同人誌『詩生活』の創刊メンバーであった。

『祖国の砂』以降では，『現代詩』2-4（1955年4月1日）に「炎天の下で」を発表，同2-10（1955年10月1日）に「縁日」を発表している。

詩集としては『制服：飯村亀次詩集』を，1955年3月，昭森社から刊行している。この詩集は，1955年5月の第10回国鉄詩人大会（秋田市）で議題として，個人詩集の批評の対象となった。

さらに，『新日本文学』1956年6月号に，「貨車ホームで」を発表している。

掲載詩の「あいつが喋っている」の一節である。

「おれは　思いだしている。
　かつて　暴力的に
　仲間が　首をきられたとき
　あいつが　少しも反対しなかったことを，」

「あいつ」とは職場の労働組合の幹部である。

H-7　つざか・もとい（津坂基）「ある機関士の歌」

作者紹介は次の通りである。「東京都　1926年2月16日生　満26歳　早大法学部中退。1949年7月から東武交通労働組合書記（東上支部派遣）。『民芸通信』（埼玉），『進路』（東武労組），『どんぐり』（東武労組東上支部）」

「ある機関士の歌」は『新日本文学』1952年2月号に掲載されている。初出は埼玉『民芸通信』9号である。

さらに「朝鮮全羅北道群山小学校卒。同群山中学校卒。第一早稲田高等学院文科卒。1945年4月徴兵を忌避して朝鮮に逃げる。敗戦後引揚げて埼玉に落ち着く。早大中退後，一時埼玉県比企郡に落ち着き，農民運動に従事。」と書かれている。

徴兵忌避は，ごく少数だが，戦中日本でもあった。俳優の三国連太郎もその一人で，唐津まで逃げたが，発覚して連行され，二等兵として，南京や瀋陽で兵役を送っている。丸谷才一の『笹まくら』も徴兵忌避で日本中を逃げ回った一人の男の話である。丸谷才一は1925年生れ，1952年には27歳である。自身は，兵役に就いている。

朝鮮で育ったつざか・もといは，1945年4月から8月まで4カ月間「徴兵を忌避して朝鮮に逃げる。」

I　工場労働者

ここでは，矢島章，輪島努，なかむら・やすし，浜田矯太郎の4人を対象とする。他にも，工

場労働者の経験を持つ者は多い。

I-1　矢島章「ガントリークレン」

作者紹介では，「神奈川県横須賀市　1928 年 6 月 4 日生れ　24 歳　逗子開成中卒。仕上工，進駐軍労務者を経て，現在生活協同組合職員。『新日本文学』『文学芸術』『岬（新日本文学横須賀支部）休刊中』」となっている。『新日本文学』1951 年 10 月号に「ガントリークレン―YOKOSUKA をうたう 4―」を発表している。初出は『岬』 6 号である。

『新横須賀市史　通史編　近現代』（2014）に基づいて，「ガントリークレン」に関わる事項について概観する。

「海軍軍港都市」であった横須賀は，終戦によって，占領軍の進駐が始まった。一方，1946 年半ばまでに横須賀市は「横須賀市更生綜合計画説明書」を策定した。これによって，軍港から商港へとスムースに転換することを目指したのである。さらに，1950 年 6 月 28 日，旧軍港市転換法が公布・施行されることとなった（対象は，呉・佐世保・舞鶴・横須賀）。

「ところが，1950 年 6 月に勃発した朝鮮戦争から始まる動きは，そのような平和産業港湾都市への転換の夢を打ち砕いていった。」「1951 年に米軍から追浜の旧第一海軍航空技術廠跡の調達要求がなされ，米陸軍追浜兵器廠が設置された。廠内には，自動車製造と米軍車両の修理を事業として横須賀に設置されていた富士自動車株式会社も進出し，朝鮮戦争で破壊された車両の修理にあたり，また日本飛行機株式会社も軍用機の整備・修理のために進出した。1955 年初頭には両社合わせて 10,255 人の「特需会社労務者」，またそれ以外に「進駐軍労務者」も 17,000 人を数えていた。」矢島も一時期，その一人だった。

「しかし，休戦協定締結（1953 年 7 月）後しだいに削減され，1955 年には富士自動車の 3,000 人が削減され，1958 年には兵器廠の閉鎖に伴い，両社を含めて 10,000 人に及ぶ労働者の解雇が予想される事態となった。」

朝鮮特需は，結局一時的な需要であり，その削減後には，厳しい不況がやってきたのである。特需に依存していた地域ほど，不況は厳しかったのである。このことは，室蘭と日本製鋼所について，後述する。

「朝鮮戦争後の不況を乗り切る途は，官・軍（自衛隊）への依存以外に有効な手段はなかった。」

一方，造船業については，以下のような経緯をたどった。

「終戦の一ヶ月後，連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）は，運航不可能な船舶の修理と，すでに建造に着手されていた続行船の建造に最大限の努力を傾けることを求めた。これに応じて日本政府が指定した 20 造船所の一つに選ばれた浦賀船渠株式会社浦賀造船所では，10 月 9 日から三直 24 時間体制での作業が行われた。」「当面の作業は復興関係だった。鋼船小型漁船の建造，青函連絡船二隻の建造」などであった。

大きな変化は「朝鮮戦争の勃発により，規制がなくなり，1950 年 10 月以降に進水した 11 隻は

6,000トンを超える大型船となった。」「1959年5月には1913年（大正2年）に竣工して戦艦「陸奥」などを建造した旧海軍工廠のガントリークレン付き船台が浦賀船渠に払い下げられ」（『新横須賀市史』にはその写真が掲載されている。）「1969年6月に，合併して住友重機械工業株式会社が発足した。」「しかし，オイルショック以後の造船不振で，従業員数は1975年度の4,450人を頂点として減少し，1978年には横須賀工場が閉鎖された。横須賀のランドマークでもあった同工場のガントリークレンは，建造方式の変化と安全上の理由からこれに先立つ1974年8月に解体撤去されていた。」

掲載詩の

「夜よりも黒い骨格の
　四十メートルかのいただきに
　夜毎　赤い血のような灯を
　点々とつらね
　ガントリークレンはある
　そのままある」

矢島が詩の主題としたガントリークレンは1974年8月に解体撤去された。

I-2　輪島努「おれたちは黙って見つめる」

作者紹介では，「兵庫県相生市　1931年3月20日生れ　21歳　兵庫県立相生工業高等学校卒。播磨造船所入社，現在に至る。旋盤工。機関誌『美翠』」となっている。相生市には，播磨造船所の主力工場があった。輪島は，『新日本文学』1951年7月号に「第三図南丸に寄せる詩」を発表している。また，『新日本文学』1956年4月号に「握手」（小説）を発表している。その他に1950―51年に，全日本造船労働組合機関誌『全造船』に小説数編を発表している。

第三図南丸については，『播磨造船所50年史』に写真とともに詳しく紹介されている。「戦前わが国における代表的捕鯨母船として，その名を知られていた日本水産の「第三図南丸」は元日本委任統治領，東カロリン群島のトラック島に碇泊中，1944年12月17日空襲により前部ブリッジ付近に爆弾2発と，後部に至近弾数発を受けて火災を起し，転覆沈没したのである。戦後食糧難緩和の一方途として連合軍総司令部は南氷洋捕鯨を許可したが，当時は5000総トン以上の新船建造は禁止されていたので，20000総トン級の捕鯨母船の建造は思いもよらぬことであった。日本水産においては，「第三図南丸」(22419重量トン）の引揚げ改造工事の計画を立てその工事を当社に依頼したので，当社は社運を賭してこの難工事に当ることとなった。1950年10月救難隊員167名は現地に到着，21日「第三図南丸」の引揚げ作業に着手し，1951年3月3日完全浮揚に成功し，4月15日無事相生工場に到着した。」「1951年10月17日完成のうえ全く面目を一新した

優秀捕鯨母船として引き渡しを終了した。」

輪島努の「第三図南丸に寄せる詩」（『新日本文学』1951 年 7 月号）の冒頭の

「おまえは南の海の赤泥の中からかえって来た。」

はこの引揚げ，曳航のことを指している。

掲載詩の「おれたちは黙って見つめる」『祖国の砂』所収の冒頭の《図南丸竣工祝賀　壮行並びに感謝会会場》は，「1951 年 10 月 17 日の正午」の引き渡し祝賀会のことである。また，

「まさに（炎暑で）倒れそうになったとき
　これ飲んで働け
　とばかりに配給された
　ビタミン B_2 のこと」

は，『播磨造船所 50 年史』では，「メタポリンを配給して疲労回復をはかった」となっている。

「第三図南丸に寄せる詩」の

「おまえを 10 月までに完成させるため，会社は 1000 名あまりの臨時工をやとい入れるという。
　またおれたち働くもの同志のみにくいあらそいが始まるのか」

という語りをうけて，

「おれたちは黙って見つめる」では

「完成されてゆくに従って，続々首切られていった臨時工のことをはげしく思いうかべながら。」

となっていく。『播磨造船所 50 年史』でも次の通りとなっている。「1950 年には「さばん丸」，1951 年には「第三図南丸」の大修理工事を相次いで実施するため，1951 年 3 月ごろより臨時工も募集するようになった。1949 年ごろから本工員の数はおおむね固定し，以後作業の繁閑に応じて臨時工を増減調節した。」

本工員の数はおおむね固定し，繁閑に応じて臨時工を増減調節するのは，このころから始まっているのである。輪島の言う「完成されてゆくに従って，続々首切られていった臨時工」が多く働いていたのである。臨時工には，農家からの季節工も含まれる。製造業だけでなく，建設業などでも，臨時工に依存する度合いは高かったのである。1990 年代になってから，いわゆる非正規問題が語られるようになったが，決して新しい問題ではない。1950 年代から臨時工は景気調節弁

として使われてきたのである。

また,労働組合について次のように述べている。「当社の工員･職員両組合間に合併の話が進み,1948年6月1日両組合の合体を見るに至り，新しく播磨造船労働組合として再発足し,」「当社の労働組合は全日本造船労働組合と意見が相違したので，1952年5月同組合より脱退し，以後単独組合として行動してきたが，1955年11月に至って全国造船労働組合総連合に加入し，次いで1956年6月1日には総同盟兵庫県連合会にも加盟して現在に至っている。その間特記するほどの紛争もなく労使協調の実をあげている。」まさに「第三図南丸」の修理後に，輪島も小説を発表していた機関誌を発行する全日本造船労働組合から脱退し，同盟系の労働組合の道を歩みはじめたのである。

播磨造船所は，1960年12月1日に，石川島重工業と合併し，石川島播磨重工業となった（IHIのHは播磨なのである)。1962年，世界の造船所進水量において，IHIの，旧播磨造船所の相生第一工場は，世界第一位となった。

I-3　なかむら・やすし「螺旋階段」

中村泰（なかむら・やすし）について，宇野田（2016）は，次のように紹介する。「1950年代前半に大阪でサークル詩運動の組織者として活躍した中村泰（1927―）は，病気療養を経てホワイトカラー労働者となる前，1940年代後半には，西大阪工場地帯の日新化学（のちの住友化学）でブルーカラー労働者として働いていた。中村が詩作をはじめたのはそのころのことであり，日新化学労働組合機関誌『怒涛』の第2号（1947年1月）には，（中略）「助剤課・なかむらやすし」の「あいつ」という長い詩が掲載されている。「あいつ」というのは，当時全国を巡幸中だった天皇のこと」「1950年代半ばに詩人としての筆を折った中村は，1960年代はじめに小説を書きはじめ，1940年代後半の西大阪工場地帯における党活動・文化運動の経験にもとづく作品を書いている（中村泰「傷ついた煙突」『蒼馬』創刊号，1963年)。」「のちに中村は『田木繁全集』全3巻（青磁社，1982―84年）の編集刊行に尽力している」

『祖国の砂』の作者紹介では，中村泰（なかむら・やすし）は次のように紹介されている。「大阪　1927年7月15日生れ　満24歳　無線電信講習所中退，会社給仕，工員，公園事務員等を経て，現在大阪第一食糧事業協同組合職員（事務員)。『らんぷ』『働く人の詩』『夜の詩会』」

もう少し詳しくは,「終戦後，日新化学に工員として入社，肉体労働に従事しつつ，詩を書き始める。その後，健康上の理由で同工場を退職。食糧配給公団に事務員として勤務。詩誌『崖』『交替』を経て，個人詩誌『らんぷ』および『働く人の詩』を編集（現在両者とも休刊)，現在『夜の詩会』同人。」と書かれている。

『夜の詩会』は「南渕信の製版工房の編集所」で発行されていた同人誌である。

前述した柏岡浅治は「「へたくそ詩の論理について」の頃をめぐって」において，こう書いている。「須藤の力作「へたくそ詩の論理について」(1953年4月，加藤新五名）によれば，このエッ

セエは，「昨年 12 月，新日本文学会大阪支部の提唱で，『祖国の砂』と『京浜の虹』の在阪詩サークルによる合同討論会がひらかれた。席上，討論の中心的な語り手であった中村泰と柏岡浅治の間で，『京浜の虹』についての意見が全き対立をみせたこと」から書き起こされている。この 1952 年 11 月に，新日本文学会大阪支部から，須藤和光編集発行者で，中村泰も参加した『大阪文学』が創刊されている。「へたくそ詩の論理について」は，この『大阪文学』に掲載されたのである。

大阪における文学運動の中心的存在であった須藤和光の追悼集『須藤和光　作品と回想』（須藤和光　作品と回想刊行会，1988 年 2 月）に，中村泰は「略年譜」を執筆している。それらによると，新大阪新聞に「働く人の詩」の欄があった（須藤も同新聞社の記者であった）。「（その投稿者によって）1951 年 9 月，『働く人の詩』が創刊され，編集発行人中村泰の連絡を受け，（須藤和光は）同誌集会にたびたび出席するようになる（同誌は 4 号〈1952 年 4 月〉で終刊）。」「1952 年 7 月，詩誌『働く人の詩』の後継誌として『律動』が創刊された。」

この辺りのことについて，『律動』の編集発行者山中徳雄（山中も『働く人の詩』の同人）は「加藤新五と『律動』の関わりについて―『律動』発刊への経緯」において，こう述べている。「詩誌『働く人の詩』が廃刊になったころは，またいわゆる「働く人」の詩や「勤労詩」といわれるものの運動が，一般的に停滞をはじめた時期でもあった。それに当時，中村泰自身が思想や詩作の上で大きな懐疑やジレンマにおちいっていて，対詩誌同人間にもいろいろ摩擦やギャップを感じていた。そこへ経済的な破綻が加わって『働く人の詩』誌を投げ出したとみるのが，正当な見方ではないかと思う。」

少し長くなるが，中村のジレンマやギャップさらに経済的破綻は，当時の詩人たちの多くが抱える大きな課題であったと考えられるので，山中の文章を引用する。

「当時の中村はのちに自らを回顧しているが，「世界観としてのコムミュニズム，詩作方法論としてのアバンギャルドを身につけよと，いま考えれば冷汗もののテーゼを得々としゃべり散らしていた。」時代でもあった。また，『律動』 6 号の 1 周年記念の座談会の席で

今日，平和と独立のための闘いというものは非常に激烈な形でたたかわれている。その先頭部隊は投獄を覚悟でたたかわれている。本当の平和の詩というものは，そういった決意と実践においてはじめて歌えるものだと思う ――（中略）そんな点で詩いや平和の詩に疑問があるんだ。

と発言して，同席していた小野十三郎や加藤新五を，いささかあわてさせている。」

加藤（須藤）はあとをひきとって，そのような考え方は認めるが，「決意と実践にささえられない詩はニセモノだ」と断じることは，客観的にはそうした詩を「圧殺」するものであると注意している。前衛党と自己規定するものたちの独善的な論理と，多くの多様な考え方との関係についての問題である。

中村は，『詩と真実』10（1954 年 4 月 5 日）に「日本の動脈―全国詩活動家会議に参加して―」を書いている。

I-4　浜田矯太郎「大岡川に」

浜田矯太郎も『祖国の砂』と『京浜の虹』の双方に掲載されている四人のうちの一人である。作者紹介では，1920年12月1日神奈川生れの31歳である。高小卒後，品川の三菱重工業に仕上見習工として入所後，町工場を転々とし，工具仕上工であるが，この当時は病気のため失業中である。1947年，松永浩介，山田今次などとともに「京浜文学」発起人同人として参加した。また，新日本文学会会員である。数多く，『新日本文学』に発表している。横浜市在住である。

『新日本文学』1956年4月号の「労働雑感」では，「私は兵隊に取られた前後十三年間を，工場労働者として暮した。」と書いている。

掲載された「大岡川に」は『新日本文学』1952年5月号に掲載されたものである。この頃『祖国の砂』掲載はすでに決まっていた。初出は，『鍛冶屋』1952年3月号（第5号）である。そして，おそらく偶々だが，『京浜の虹』にも同じ詩が掲載されているのである（ただし，表題は「大岡川」）。

浜田は，詩と小説両方の分野で創作していた。とくに，小説では，1948年6月号の『勤労者文学』に発表した「にせきちがい―福岡直次郎の手記」が高い評価を受けた。これは，『勤労者文学選集』（1948年12月，新興出版社），『日本小説代表作全集　18』（1949年2月，小山書店），『創作代表選集　2』（1949年3月，講談社）に続けて，収録されたのである。後に，『コレクション戦争と文学　11　軍隊と人間』（2012年11月，集英社）にも収録されている（本稿はこの本のデータに基づいている）。

その後，小説では，「未組織労働者」（1948年4月，『勤労者文学』），「今村寅吉の家内」（1952年9月，『新日本文学』），「日本のあめ」（1953年5月，『新日本文学』），「木剣」（1954年1月，『新日本文学』），「ある秋」（1956年12月，『横浜文学』），「面接」（1957年2月，『横浜文学』）を発表している。

一方，詩も多数発表している。『横浜の空襲と戦災2』（1975年10月）に詩「アイス・キャンデー」「アメリカ兵が歩いている」が収録されている。また，『横浜の詩と詩人　戦後編』（1979年3月）に詩「アメリカ兵が歩いている」が収録されている。

『コレクション　戦争と文学　11』によれば，「晩年はタクシー運転手を体験する」と書かれている。

J　北海道

前項の「工場労働者」として，4人を取り上げたが，「北海道」のうち，大場豊吉と久保田俊夫も室蘭の工場労働者である。また，伊藤習司は，室蘭地区労働組合の書記として，工場労働者に近い立場にいた。「地域リーダー」の吉田美千雄も室蘭にいて，文化運動を担っていた。前述したように，彼らは一つのサークルのメンバーだったと考えられる。

J-1　伊藤習司「転轍手」

作者紹介は次の通りである。「室蘭市　1925 年 7 月 16 日生れ　26 歳　大泊商業学校卒。室蘭地方労働組合協議会書記。『新日本文学』（1948 年入会），『北方詩人』（1949 年同人参加），『壁』，『錆』（1951 年同人参加）」『壁』は伊藤習司が編集発行人だった。『錆』は内田豊清主宰の詩誌である。

大泊は樺太であり，引揚げてきたのであろう。樺太の在住日本人は，45 年 8 月 9 日のソ連の参戦によって，厳しい状況に追い込まれた。8 月 15 日を過ぎてもなお，多くの犠牲者を出したのである。

伊藤習司は，この当時，1952 年には室蘭地方労働組合協議会書記であるが，一時的な専従と考えられる。仕事としては，北海道電力室蘭でレッド・パージにあい，専従を経て，北海道労働金庫へ転職し，その後も上砂川，夕張，釧路など各地へ転勤する状況であった。

『壁』第 1 号は，1952 年 2 月 1 日に刊行されている。編集同人は，伊藤習司，久保田俊夫，大場豊吉，吉田美千雄，金丸義昭，三浦進であった。

『新日本文学』1952 年 5 月号に，「挨拶」を発表している。また，『列島』6（1953 年 10 月 10 日）に「操車手」を発表している。これは『祖国の砂』に掲載された「転轍手」を改題した作品である。

さらに，『新日本文学』1954 年 3 月号に「炭鉱労働者へ『新日本文学』を」を投稿している。「室蘭をはなれて，空知炭田上砂川町へ来た。」「私の就職先の労働金庫」「２，３月のちにはまた夕張に転勤になるはず」と書かれている。北海道の炭鉱のことについては，かさい・まさるの項で後述する。

1957 年 12 月に『伊藤習司第一詩集　黒い兵隊』（札幌市〈先列〉編集部発行）を刊行している。「操車手」「挨拶」も含まれている。後書きに「『黒い兵隊』時代について」が書かれている。それによると「1950 年から 53 年にかけての作品である。『新日本文学』『錆』『北方詩人』などに発表した作品を中心に編集した。」「『黒い兵隊』は占領下の日本を私なりの姿勢で見つめ形象化したものである。朝鮮戦争の前後にかけて狂気の弾圧政策がとられ，文学活動もその精神が抵抗に直結すればするほど困難を増していた。私たちの仲間は徹底的にマークされ，警備課（もとの特高）の連中に家宅捜査されたことも再三であった。その頃私たちは文学とは何か，ということを真剣に考えた。文学は書斎の中で創り出されるものではなく行動のなかからこそ創り出されるものであるということを理解した。」

「『黒い兵隊』時代に，私は良い仲間を持っていた。吉田美千雄，久保田俊夫，大場豊吉，金丸義昭，菅野好子郎や室蘭図書館の人たち。」

J-2　大場豊吉（大場盛）「朝の X 字路で」

作者紹介は次の通りである。「室蘭市　1923 年 1 月 27 日生れ　29 歳　室蘭武揚高等小学校卒。

店員，測量工夫，写図生等をやり，徴兵で海軍に入る。暗号員として防府，豊川，大湊等に配置され，復員後，日雇い，炭鉱夫，土工をやり，1947年4月，富士製鉄室蘭工場に入る。そのまま，工場労働者（硫酸工）として現在に至る。1949年4月，新日本文学会室蘭支部結成に参加する。『新日本文学』」

『大場豊吉詩集　すべて気休めの言葉は死ね』（1977年1月，噴火湾社）の著者略歴では，上記および「炭坑，土木建築現場，化学工場など雑多な底辺労働生活に生きる。1971年病をえ，75年退院，療養中。元新日本文学会会員，詩の村同人。」となっている。作品年譜で「朝のX字路で」（1951年10月）は，『壁』1号（1952年2月）に発表し，『祖国の砂』所収となっている。（『壁』は，前述伊藤習司編集発行）

「朝のX字路で」は，室蘭の工場労働者の通勤風景を描いている。輪西は室蘭の地名である。

「輪西のわかものたち楽しそうに
　目で挨拶しながら門に入る」
「囚われの日本よ
　ここは日本プロレタリアート
　密集する富士鉄輪西　室蘭
　中島社宅七門前の
　晩秋の　海風なぶる
　朝のX字路だ」

その後『列島』11（1954年11月10日）に，「旺盛な批評精神」を発表している。また，中村（2014）によれば，1956年1月『鉄鋼詩集』が刊行され，大場の「工場風呂」も掲載されている。

また，『夜汽車』（吉田美千雄の項参照）の編集を，1958年から担当した。

J-3　久保田俊夫「スクラップ集積場」

作者紹介は次の通りである。「北海道室蘭（生れは岩内町）　1928年6月12日生れ　24歳　室蘭中学卒。日本製鋼所室蘭製作所勤務。新日本文学会会員，『北方詩人』同人，『木星』同人，『壁』同人，『JAP』同人，『詩と詩人』会員」『北方詩人』は生石保編集，『壁』は前述伊藤習司編集である。

1952年2月第一詩集『貧巷（すらむ）』（発行所木星社（札幌）），1953年10月『三人以上の善人』を刊行している。大場豊吉による紹介では，「『祖国の砂』や1954年10月『死の灰詩集』（宝文館）に作品が載る」となっている。また，1952年戯曲『フゴッペ岩』で第2回北海道労働文化奨励賞を受賞している。久保田俊夫の作品には「平明な民衆詩を目指した社会性をもつ抒情が，全作品の底流にある。」

『現代詩評論』６（1954 年７月１日）に「三十冊のサークル誌の中から」を，７（1954 年９月１日）に「前夜の記録（２）」を発表している。

さて，久保田俊夫は日本製鋼所室蘭製作所勤務である。ここで，『祖国の砂』の２年後の 1954 年に大規模争議が起きたのである。

1950 年代に入っても多くの企業で人員整理反対闘争は数多く行われていた。人員整理ということは解雇が頻繁に行われて，労働組合が反発した争議が行われていたのである。1952 年の「電産・炭労争議」は電力・石炭産業の産業別組合の大規模な争議であった。この結果，産業別組合とくに電産は敗北し，企業別組合への転換が進んで行ったのである。

ところが，企業別組合であっても，長期の争議が起こり得ることが明確になったのが，1954 年の日本製鋼所室蘭製作所争議であった。詳細にみれば事業所別組合である。室蘭製作所の長期争議である。

小池和男は，飯田他（1976）で次のように評価する。「1954 年６月 17 日，日本製鋼所は，その労働組合に対し，976 名の解雇を提案した（このほか，臨時工など非組合員の解雇 270 名）。しかも，そのほとんどが主力工場，室蘭製作所に集中した。この工場の組合員 3742 名に対し，915 名。実に４人に１人にあたる。以後，多数の負傷者をだした 197 日の激しい争議がつづく。寒風吹きすさぶ 12 月 26 日，662 名（当初の会社案より 253 名減）の解雇者と，約三分の一の第二組合をのこして終る。日鋼室蘭の争議である。」

「なぜここに焦点をすえるのか。一言でいえば，敗戦後それまで急激な昂揚と急速な後退という変転をしめしてきたわが国企業別組合がついに定着した，とみるからである。」

「これ以後，大規模な解雇は姿をけす。もちろん，1955 年以降の激しい雇用増という条件の大きな変化があった。だが，資本金の２倍弱に達した解雇のコスト高が，この日鋼室蘭争議でしめされたことも，あずかって力あったろう。しかも，そのコストがごく普通の組合によってもたらされたことが，重要なのである。」

橋本寿朗（1995）も，次のように述べる。「日本製鋼所室蘭製作所争議は，ごく普通の企業別組合が半年にわたって粘り強く闘い，資本金の数倍という大きな損失を企業に与えた。大企業の「よい職」を守るという点で企業別組合は強い戦闘力を発揮したのである。最終的には解雇を撤回させられなかったが，大企業経営者は解雇のコストが高いことを学んだ。ここから経営者の裁量による解雇を原則として避け，新規採用を慎重に行い，長期継続する雇用期間に労働者の熟練を高める工夫が目的意識的に追求され始めた。」

日本製鋼所室蘭製作所争議は，戦後日本の労使関係の分岐点だったのである。翌 1955 年から春闘も始まり，協調的な労使関係と熟練を重視した能力主義人事政策が広範に採用されていくのである。

久保田俊夫は，この室蘭製作所の労働組合の活発な活動家だった。また，吉田美千雄は室蘭文化サークル協議会事務局，伊藤習司は前室蘭地方労働組合協議会書記そして労働金庫勤務，大場

豊吉は隣の富士製鉄の工場労働者で活発な活動家，周辺の彼らも活発な活動家であった。特に，久保田俊夫は争議の真只中にいたのである。

伊藤習司の『黒い兵隊』のなかの「出発」の副題は「アジア太平洋地域平和会議出席の久保田俊夫，永井安治両君のために」である。この会議は，中国で行われたのである。中国に代表団として派遣されるほど熱心な活動家であった。ただし，旅券拒否で実際には行けなかったようだ。

この日本製鋼所室蘭製作所争議については，会社側，第一組合側，第二組合側から多くの資料が出されている。まず，会社側の資料から見ていこう。『日本製鋼所百年史』である。日本製鋼所は，有数の兵器生産企業である。また，兵器そのものではなくとも，朝鮮特需によって，鋳鍛鋼製品および極厚鋼板等の需要は拡大した。しかし，「朝鮮戦争ブームは長続きしなかった。朝鮮休戦会談の開始とともに，特需は減少し，一転して，日本経済は反動不況に陥った。特に，1953年からは，国家予算成立の遅延，財政投融資の削減，金融引き締め政策の断行などの悪条件も重なり，一段と不況の様相を強めることとなった。」「当社ももちろん，この不況の影響を被り，当社の鋳鍛鋼製品および極厚鋼板等の需要は著しく減退した。」朝鮮特需は一時的なことであり，その後深刻な不況に見舞われたのである。前述した横須賀市と同様である。

「このような事態に臨んで，経営の徹底的な合理化を企画し，既に実施中の設備の合理化および経費節減を強力に推進するとともに，今後の受注量がさらに20―30％程度減少するという予測の下に，経営の立て直しを図るためには人員の合理化が避けて通れなかった。」

「こうして，1954年6月17日，労働組合連合会と団体交渉を開き，室蘭製作所をはじめ，合計1246名（うち室蘭製作所1010名，広島製作所200名でほとんど）の整理案を発表した。」

室蘭以外ではこの整理案で了解が得られた。日本製鋼所広島製作所では1949年に大争議があり，『われらの詩』（後述且原純夫の項（N-1）参照）でも取り上げられている。その後，広島製作所では，労働組合の力が削がれ，54年の整理案では大きな解雇反対闘争には至らなかった。また，室蘭の臨時作業員組合も調印した。

しかし，「室蘭製作所の正規組合員915名（組合員総数3742名）との交渉は紛糾した。7月5日の整理断行の通告以後，7月10日からストに入り，現地組合（室蘭製作所労働組合，組合長小林豊太郎）と激しい紛糾が続き，中央労働委員会の斡旋による終結まで，実に197日間に及ぶ大労働争議となった。完全に正常の作業状態に復するまでには251日という長期間を要し，前後して起こった尼崎製鋼および近江絹糸の労働争議と並び，1954年における3大労働争議と言われ，世間の注目を集めた。」

争議の経過を簡単にまとめると，解雇通知書の送達，組合の一括返上，デモ，会社のロック・アウトとなり，工場機能は全く停止した。会社は，整理人員を116名減員する案を提示し，組合執行部は軟化したが，執行部案は，中央闘争委員会，組合大会でも否決され，闘争は継続した。「家族ぐるみ，町ぐるみ」の闘争に発展したのである。立ち入り禁止処分が出され，組合員を排除するために，警察が出動する事態に至った。こうした中，9月23日第二組合「室蘭製作所新労働

組合」が結成されたのである。両組合間で暴力事件が続発したが，新組合は人員整理に関する紛争終結に調印した。最終的には，1955 年 1 月 26 日に，基本協定に基づく実施細目の協定がなされ，大争議は終結し，臨時工を含め 784 名の人員整理がなされた。

「なお，この合理化に要した費用は，おおよそ 10 億 5300 万円の巨額に達するものであった。」日本製鋼所の売上高は，1953 年の 84 億円から 54 年の 50 億円まで減少した。需要が回復した 1955 年は 103 億円に増加している。この年から，日本の高度経済成長が始まるのである。

1955 年以降の労使関係は，安定した協調関係が模索された。日本製鋼所の労働組合は，「民主的労働組合主義」を理念とする「全国金属産業労働組合同盟」に 1957 年加盟した。1955 年 10 月には，労働協約が締結され，1957 年から全社的な「中央労使協議会」が開催されることとなった。ここでは，経営全般にわたる事項と労務人事に関する具体的事項が協議された。労使協議制の開始である。人事政策としては，1960 年から合理的な資格制度（後に職能資格制度）が導入されることになった。

久保田俊夫は，この室蘭製作所の大争議で，労働組合の中核にいたのである。第一組合側の資料として『1954 年日鋼室蘭闘争の記録―日鋼労働者と主婦の青春　上・下』（広田義治編著）を参考にする。広田は，組合教宣部長で，唯一の共産党員であった。組合全体では，社会党左派がリードしていたが，その中で 1954 年 2 月教宣部長になった広田は，教宣部員に検査の久保田俊夫を希望した。すぐには実現しなかったが，「私は，久保田が中心の「日鋼文学サークル」の仲間にもなった。久保田は詩人で新日本文学会室蘭支部で活動していた。前年の日本平和国民大会に日鋼から私と二人で参加した。」

「1954 年 6 月中旬，企業合理化発表で腹をくくって職制の許可も得ないで教宣部にきて手伝いはじめた。」「解雇の「個人通告」の出る直前か，直後か。思いついたのが，会社の柵のコンクリート塀にスローガン「首切り絶対反対」「再びこの工場から兵器を出すな」を書くことだった。同勢は私，久保田等の五人だったと記憶している。（久保田の記憶では，最初鍛錬工場の屋根に書こうということだったが，危険なので塀になった。）」

「ロック・アウトのさなか，54 年 8 月 28 日午前には，雄別炭礦尺別労組から教宣部長，青行隊文化部長ほか 2 名の人達がかけつけてくれた。27 日の夜 6 時に出発したとの話で，順調にいっても 16 時間かかるそうである。同労組は昨年 1200 名の内 300 余名の希望退職という首切りで，今 800 名いるがその後の職制の圧迫，労働強化はすごく，「それで何が何でも日鋼に勝ってもらわねば。あなた方の闘いは俺たちの闘いだと，理屈ではなく本当に心から思っている」と語った。」（雄別については，後述。他にも全道，全国から多数の労働組合が支援に訪れていた。）

「 9 月 18 日，警官の出動が迫る中で，積み荷阻止が企画され，指揮をとる広田は，教宣部員の要の久保田には「おそらく俺は戻ってこれないだろう。あとは頼む。」と話した。久保田は，「僕たち 4 人で，あんた（広田）の護衛についたんだ。そして，あんたがぶんなぐられて眼鏡を飛ばされて。」と記憶している。（1993 年夏の回顧）」

「9月22日，もと，文学サークルに入っていた女の子からこっそり電話で知らせてきた「久保田さん，逮捕状出ているから気をつけて」と。それは，久保田，広田等の5人だと言った。その女の子の父が，母恋の交番の警察官だった。(母恋は室蘭の地名)」

翌日，第二組合が結成された。

久保田俊夫は「その後の日鋼室蘭―1954年12月26日の全員大会から以後メーデーまで　日鋼労働者の報告―」で，争議終結のプロセスと以後の状況について，第一組合の立場で報告している。大きな課題は，①解雇撤回者に誰を残すか，②入構後の職場闘争をどう組んでいくか，③職場闘争と併行して第二組合との話し合い，協力した生産体制をどう具体化していくのか，④職場を去っていく仲間たちを守る闘い，を挙げている。さらには争議中に，莫大な借金を抱え，どのように返済していくかという課題もあった。久保田の報告では，第一組合の努力で，課題に対処していっているが，いずれも困難な課題であったことは間違いがない。特に，争議中に発生した莫大な借金は，第一組合の組合員に重くのしかかったであろう。

なお，広田義治は，解雇後「町場（機械・仕上・鉄工）を転々として今日に（1993年)」至っている。久保田俊夫は，闘争後上京，機関紙通信に勤めた。1992年ころ室蘭に戻って，この広田の本の中で証言している。なお，この本には隣の富士製鉄の労働組合化成課中央委員として，第一組合を支援する立場で大場豊吉もたくさん登場する。

久保田俊夫は，室蘭に戻った1992年以降，再び詩作に打ち込み，多くの詩集を刊行している。1992年『薄墨色の絵巻』，『折節のうた』，1993年『白の伝説』，『砂の絵』などである。

J-4　生石保「札幌で」

生石（おいし）保の作者紹介は次の通りである。「小樽市　1928年4月1日生れ　24歳　中卒。『北方詩人』『新日本文学』『詩と詩人』『列島』『後志文藝』『芸術前衛』『オメガ』」生石保は，『北方詩人』の編集発行者である。

さらに「中卒だが，芸術家になるつもりだったので，一年よりサボリだし，図書館がよいをした。よくでれたと僕自身がおかしくなる。とにかく文学仲間と愉快に遊びました。」「小学三年より詩を書く。労働者街の春はきたない。春の雪どけをきれいとはおもわないとかいたらホメられた。戦後『灯』を出す。北海道の民主主義詩人を結集して『北方詩人』を出す。現在4号編集中。」「いわゆる職なるものをもった事なし。絵をかき，演劇をして生きている。しいていえば「演劇人」とでもなるか。しかし自分は詩人が職業とおもっている。人形劇団ヒマワリ座，クレオン座，札幌演劇研究所を経ていま北方芸術劇場。」と書かれている。

『新日本文学』1951年8月号に「新聞」を発表している。初出は『北方詩人』2号である。

また，『列島』は，1952年3月に創刊されたが，はじめ葦会から刊行された。創刊号の編集委員は，安部公房，木島始，許南麒，椎名麟三，関根弘，野間宏等であるが，葦会の山本茂美も加わっており，発行人となっている（第2号まで)。このほか，地方委員として，長谷川龍生，御庄博美，

伊藤正齋などとともに，北海道からは，前述した吉田美千雄とともに，生石保も参加した。

J-5　かさい・まさる（笠井勝）「エアー・ドリルのうた」

作者紹介は次の通りである。「北海道釧路国阿寒郡雄別炭山（現在はない）　1928 年 4 月 24 日生れ　24 歳　雄別小学校卒業。採炭夫。『火山脈』（雄別炭鉱）」

北海道は九州と並ぶ国内有数の炭鉱地帯であった。夕張，幌内などの空知の炭鉱とともに，釧路地方の炭鉱も大規模であった。雄別炭鉱はその一角にあった。

かさいの掲載詩の一節である。初出は『火山脈』17 号で，『新日本文学』1952 年 2 月号に掲載された。

「エアー・ドリルよ
　お前は忠実なめくらの花嫁だ。
　若者たちの腕にあまえて唸るお前の根気と
　生活を守る俺たちの根気は
　平行して
　毎日四〇〇メートルの地底で競走した。」

かさい・まさるは『列島』 8 （1954 年 5 月 10 日）には「ふぶき」を発表している。

前述した蛭間裕人の項（E-5）で，蛭間裕人の父・染谷格が，雄別炭礦に新日本文学会雄別友の会をつくる働きかけのために訪れたことを書いた。そこでは「文化部長の荒さん」に案内されたのである。

また，前述した久保田俊夫の項（J-3）で，この雄別炭礦尺別炭鉱労働組合からも，日本製鋼所室蘭製作所争議の支援に駆け付けたことを取り上げた。この当時，北海道の石炭産業は重要な基幹産業であり，その労働組合である北海道の炭労は，強力な労働組合であった。電産などの大争議で，組合が敗れていく中で，唯一，三井鉱山闘争だけは，6739 名の人員整理案に対し，三井鉱山労働組合連合会の三池，砂川，美唄，芦別 4 山（三池以外は北海道）で，総評・炭労の支援を受けて，1953 年 11 月 27 日人員整理の全面撤回をかちとることができたのである（「英雄なき 113 日の闘争」）。

水溜『「サークル村」と森崎和江』には，北海道の炭労の運動と，そこにおける文化サークルの状況が詳しく述べられている。

「火山脈文学会は，『新日本文学』の読者の集まりによる「新日本文学雄別友の会」からスタートした。」（水溜真由美）染谷格の働きかけが功を奏したのであろう。「1949 年 9 月に「友の会」の機関誌として『文学戦線』が発行され，1950 年 2 月発行の 5 号より『火山脈』と改題された。」（水溜真由美）

『雄別炭礦労働組合創立十周年史』によれば，1948年の労働組合常任書記（文化情宣担当）が荒貞夫である。染谷格を案内した人である。1949年7月文化部となり，文芸機関紙『山脈』が発行された。「特に文学活動に至っては山脈を中心に『火山脈』『黎明』等寮，職場，グループで発行された文芸誌は八冊に及び，中でも火山脈の関谷，武田，黄川田各氏のプロレタリア文学を基盤とした生活記録的表現」が強調されていた。この『十周年史』の編集責任者も荒貞夫自身である。

『十周年史』によれば，1950年10月頃レッド・パージが雄別でも実施された。「山を去った同志」として，前執行委員長や文学会長の関谷文雄が挙げられている。

『二十周年史』では，「雄別において文化運動の最も盛んだったのは，レッド・パージ前年から1957年頃まででであった。」と評価されている。「1952年5月「文化サークル協議会」が正式に発足した。参加サークルは，火山脈文学会，短歌会，俳句会，くるみの会（演劇），軽音楽，北彩会（絵画），書道，民謡，尺八，九サークルに達した。」「その後，写真，弁論部が生れ参加している。」「1954年頃からうたごえ運動が進められた。3月，三井美唄での第1回炭礦うたごえに雄別から出席したことを契機に，闘争の激化と相まって，やまには急速にうたごえが広がっていった。」「うたごえが気勢をあげ，生活綴方の運動，学習活動が新たに起きるが，それも1960年を頂点とし停滞の方向に向っていった。」

「文学活動の中心は何といっても火山脈文学会であり，その評価は炭礦ばかりでなく他産業の活動家にも影響を与えた。」「レッド・パージ以前は新日本文学会友の会として『火山脈』を11号まで発行したが，パージ以降は新しい書き手を結集し「火山脈文学会」を結成して，この事業を引き継ぎ，絶えることなく文学活動を発展させた。1962年9月，第52号まで発行されたが，残念ながらここで中断し，以後発行されていない。」（二十周年史）

「（火山脈は）1960年以降に活動が停滞したことが推測される。50年代を通じてコンスタントに発行され続けた『火山脈』は文学サークル誌としては極めて長命であった。」（水溜真由美）

石炭産業全体の趨勢から，炭鉱はやがて軒並み閉山に追い込まれていくのである。雄別炭礦株式会社は，釧路市（旧阿寒町）の雄別炭鉱の採掘と自社鉄道による運炭，釧路炭田の旧音別町の尺別炭鉱の採掘と自社鉄道による運炭，浦幌炭鉱（浦幌町），上茶路炭鉱（白糠町）などを経営する上場会社であった。だが，エネルギー構造の変化に伴って，1970年に，資金繰りの悪化により，倒産したのである。

雄別炭鉱のあった旧阿寒町雄別地区は，住民15,000人程度の人口が一挙に離散し，数年で原野となった。何と町が消えたのである。旧音別町尺別地区でも住民の集団移転が行われた。

読売新聞2007年9月29日版によれば，次の通りである。「「まだまだ掘れる石炭はあったんですよ。会社は採算のみを優先して，とにかく，幕を引きたかったんでしょうね。思い出ですか？つらいことばかり。事故で，かけがえのない仲間を失いもしました。今も鮮明に，脳裏に甦ります。」「採炭を準備していた坑道もあったほどですから。正に，体力を残しての閉山でした」と語っているのは，採炭現場のリーダーとして奮闘した笠井勝さん（79）。「炭礦と鉄道資料館」の管理

人である。」

注

引用参考文献は，第四回に掲載する。